

この話はフィクションです。

実際の人物・団体とは一切関係ありません。

第一章 魔王軍直属騎士団長の慰み者

「着いたぞ、ここだ」

冷たい声に促されて馬車を降りると、目の前に広がっていたのは豪華な屋敷だった。

「今日からここがお前の新しい家だ」

魔族騎士団の団長、ローウェル・ハイデンはこちらを振り返り、そう告げた。

絹のような銀髪に、シャープな眉。灰色の瞳は切れ長で、意

志の強さを伺わせる。まっすぐな鼻筋と、薄くてすっきりとした形の唇。どこにも欠点の見当たらない、完璧な顔立ち。

ダークブルーの軍服は、彼のために仕立てられたといっても過言ではないほどよく似合っている。

恐ろしいほど美しい魔族は、私の手を掴むと屋敷へ向かって歩を進めた。

これまで聖女として生きてきた孤独と祈りばかりの人生はここで終わり。これから私は、彼の慰み者として過ごすことになる。

重厚な造りの扉を開いてすぐ目についたのは、高い天井から吊り下げられた大きなシャンデリアと、螺旋階段だった。

玄関には執事とメイドがズラリと並んで、主人の帰りを歓迎する。彼らは角や尻尾や翼があり、いかにも魔族らしい風貌をしていた。

「彼女を頼めるか」

ローウエルの声に、赤髪のメイドがロング丈のスカートを両手でつまんで礼をする。彼女もまた、美しかった。

「もちろんです。聖女様、こちらへどうぞ」

メイドに案内されたのはバスルームだった。全身を泡で丁寧に磨かれて、何人もの大人が泳げそうなほど広いバスタブに浸かる。

ミルク色のお湯はあたたかくて、緊張でこわばった身体から

余計な力が抜けていく。ふーっと息を吐き出せば、側に控えていたメイドが口を開いた。

「聖女様は、どうしてここに來たのですか？」

「え？ ええと……。その、国からの命令で」

「まあ、そうなんですね。ローウェル様が女性を連れて歸るなんて初めてなので氣になって。普段なら魔王様から見合いの話が來ても煩わしいからと断るのに」

「はあ……」

曖昧に頷けば、メイドは意味ありげに微笑んだ。

「……でも、聖女様ならわかります。だって清らかで、かわいらしくて……とってもおいしそうだから」

バスルームを後にしてメイドに着替えさせられたのは、素肌

が透けるほど薄手の生地で仕立てられた白いドレスだった。胸元には眩く輝くビジュ―が飾られ、裾には細かなデザインのレースが施されている。

とても美しいけれど……祖国では肌を極力見せない修道服を着ていたので落ち着かない。

「あの、下着は」

「やだ聖女様ったら。下着なんて必要ないですよ。どうせすぐ脱ぐんですから」

クスクスと楽しそうに笑われるけど嫌味はない。だからこそ……深いため息を吐いて、諦めるしかなかった。

「ローウェル様、聖女様の準備が整いました」

「入れ」

屋敷の主人の寝室は、ベッドの他の家具といえばチェストと書類が積み重なった机という必要最低限のものがあるだけだった。雪崩を起こしそうなほどの紙の山は、魔族の騎士団長という彼の地位の高さをそのまま表している。

「風呂に入って顔色がだいぶマシになったな」

軍服を脱いで黒いシャツにスラックスというラフな服装へ着替えたローウェルは、腰かけていたベッドへと私を手招きした。

ここからその表情は読み取れない。おそるおそる隣に座れば、ベッドは音も立てずに私を支えた。

「さて……お前も災難だったな。まさか、国の第一王子が魔界の領域に足を踏み入れた代償として魔族に捧げられるとは」

「我がリチエーゼンは小国です。万が一、魔族との争いに発展すれば簡単に滅んでしまうでしょう。……仕方ありません」

国の第一王子が魔族に魅入られて、魔界へ足を踏み入れたという知らせを受けたのはつい先日のことだった。魔族への宣戦布告と受け取られても仕方のない過ちに、彼の父親であるリチエーゼン国王は、謝罪として『魔族に対抗する神の力を持つ聖女を彼らに捧げて、無抵抗を証明する』という行動をとった。

「だからといって、聖女を魔族へ捧げるとは……。要は慰み者として売ったということだ。愚かにもほどがある。が……そのおかげでお前と出会えたのだから、感謝しなくては」

ローウェルは私の手を取ると両手でギュッと握った。彼の手のひらは大きく、冷たい印象とは裏腹に温かい。

「……お前に一目惚れしたんだ」

真剣な瞳が真正面から私を射貫く。

「……………え？」

「お前の処遇を決める時、ゴブリンの村へやるか、トラップダ
ンジョンで見世物にするかと大臣たちが恐怖を煽っただろう。

……でも、お前は泣かなかった。顔を青ざめて、声もひっくり返って……。それでも、気丈に振る舞おうと必死に前を向くお前に衝撃を受けたんだ」

あの時は正直、不安でいっぱいで……ローウェルの印象はあまりなかった。まさかそんな風に思っていたなんて。

「オレにとって人間は、傲慢で愚かで弱い生き物だった。どいつもこいつも過剰なほど魔族を恐れて、自分可愛さから身内を簡単に売る。リチエーゼンの国王もそうだ。……けれど、お前は泣き言ひとつ言わなかった。こんなにも高潔な人間を見たのは初めてだよ」

握り込まれた手を強く引かれて視界が真っ暗になった。整髪料と、冷たい夜の空気と、かすかにアンバーが混じったような香り。はじめて触れる大人の男性の匂いと体温に心拍数が上がる。

「ちよつと……！」

魔王軍の騎士団長というだけあってローウェルの体は私をすっぽりと覆ってしまえるほど大きく、手足を動かしてもビクと

もしない。

「ここまで高潔な女が、オレのちんぽの前に跪く様が見たいと思っただ……♡」

「ヒッ……!!」

熱い舌がぬるりと首筋を這って、ゾクリと鳥肌が立つ。硬直した背筋を薄い布越しにゆっくりなぞられた瞬間、とっさに彼の胸を押し返した。

「いやッ!」

「そんなに怯えるな。なにも命をとるわけじゃない」

その目はまるで獲物を狩る獣のようで……恐ろしいのに、目を離せない。

——魔族の中には、上級魔族と呼ばれる者が存在する。彼ら

は魔力が強いだけでなくコントロールにも長けているため、人間とほとんど見分けがつかないそうだ。

ローウェルには尖った牙も、鋭利な耳も、長い尻尾もない。けれど……油断するとこの身すべてを捧げてしまいそうになるほどの美しさこそが、彼が魔族である証明だった。

「唇を大きく開けて」

「あ……」

甘く響く声に、口が自然と開く。

「次は舌を出して。……そう、べーって」

「ん、え……」

「いい子だ。そのまま動くな」

ピタリ、と四肢が硬直する。静寂に包まれた部屋の中、自分

の荒い息だけがやけに響いた。

ローウェルも同じように舌を差し出す。吐息だけが絡むほど近い距離で、舌先に溜まった唾液が重力に逆らうことなくトロリと垂れて……私の舌へと落ちた。

「……くくくッ♡♡」

「飲み込んで」

「ッ、……ン、く」

あたたかな唾液がゆっくりと喉を通る。なんだか甘くて、熟れた果実のような味がした。他人の唾液なんて嫌なはずなのに、不思議と不快感はない。

「これで恐怖は薄れるだろう。聖女なら知っているとは思うけど、魔族の体液には媚薬効果があるから」

彼は私の唇を親指でそつと拭うと、妖しく微笑み……その手を胸元へと伸ばした。

「アッ……！」

軽い力で胸を揉まれて、つい手に力が入る。薄手のドレスに皺が寄るかもしれないけど、気にしていられない。

「これが、聖女の……。なんてやわらかいんだ……。♡」

感触を確かめるような動きが、下乳を掬ってプルプルと揺らすものに変わる。恥ずかしくてたまらないのに……。鼻に抜けるような声が漏れるのを止められない。

「や、あん……。♡」

「なあ……。お前は処女だと聞いたが本当なのか」

「はっ、い……。聖女は神に仕える者として、清らかであるよ

うにと定められているので……」

正直に告げれば、ローウェルは表情をパツと明るくさせた。

真冬に可憐な花が咲いたような微笑み。それなのに、指の動きはひどくいやらしい。

「そうか、お前の初めての男になれるなんて光栄だ。……それなら、しっかり慣らさないと」

「ン……ッ、あ♡」

先端を人差し指でピンツと軽く弾かれて体が跳ねる。ゾクゾクとした感覚にとまどえば、今度は指先が乳首をグツと押し込んだ。

「あアッ、ん、うう………！」

甘ったれた声にローウェルはさらに気をよくしたのか、今度

は乳輪の縁をゆつくり、クルクルとなぞった。

整えられた爪先がほんの少し触れるたび「あ……ん、んあう♡ ああん……」と蕩けた喘ぎが溢れてしまう。

「媚薬を口にしたとはいえ、これは相当な淫乱の見込みがあるな」

「ア……ッ、な、に？　っん、もおそれ、いやあ……♡♡」

「なんでもない。準備を進めよう……こちらへ来い」

ローウェルはゆつくりと仰向けになるとベッドへその背を預けた。上目遣いでこちらを見つめて、自分を指差す。

「ここに——オレの顔にまたがれ」

「またぐって、なにを」

「いいから、はやく」

言葉の意味を理解しないまま指示通りにしゃがめば、股の間から彼と目が合った。

「もつと足を広げて。ガニ股になれ」

「そんな卑猥なこと、できるわけ……！」

「お前に拒否権があるとでも？」

「うう……」

自分でもろくに見たことのない、秘めた場所を他人に……それも魔族に晒すなんて信じられない。

これが夢ならどんなにいいか。リチエーゼンの聖堂で、いつもどおり静かに神へ祈りを捧げる日々に戻れたら……。

「これが、聖女の処女まんこ……。入り口がぴたりくっついて、色が薄いな。とても綺麗だ」

「ひゃっ、触っちゃだめ……！」

「こら、危ないだろう」

「わっ!? あ、ありがとうございます……」

「なにか掴めるものを出す。……これに掴まってろ」

ローウェルが指をさした先、私の胸元に透明な結晶で出来たポールが現れた。肩幅ほどの高さのそれは、両手で握れば体をしっかりと支えてくれそうだ。

魔法を使うには杖や呪文が必要なはずなのに……指先ひとつでこれだけのことができるなんて。

「ああ……いい眺めだ。ぴったり閉じたまんビラを左右に広げると、中まで見える。……薄い襷があるが、これが処女膜か」
「やだ、ジロジロ見ないでください……！」

「せっかくの処女膜だ。前戯で破いてしまわないよう気をつけないとな。……もう少し腰を下ろせるか」

羞恥で無意識に浮かせていた下半身を深く落とせば、熱い息が股にかかった。ポールをギュッと握りしめて羞恥に耐えていると……やわらかくて湿ったものが、私のそこをベロリと舐める。

「ひゃっ!？」

「はあ……聖女まんこ、うま……♡レロ、レロレロ……♡♡」

「え？ え……ッ？ あ、うそ、舐めッ!? いやあっ!」

「こら、暴れるな。次やったら魔法で縛りつけるぞ」

「ごめんなさ……いつ♡ああんっ!! アッ、うあっ!」

「おとなしくオレに処女まんこ捧げて、あんあん喘いでろ♡」
ローウェルは穴の外側にある襷の片方を咥えて引っ張ると軽く歯を立てて、口の中で遊ぶ。

「信じられない、何してるの……！」

「ン……。聖女のまんビラ、うまい……。♡」

「……さっきから、意味のわからない単語ばかり……。！」

「そうか？ 別に珍しい言葉でもないだろう。人間も使うぞ」

「え……？ う、嘘よ。だってそんなの聞いたことない……。！」

「

うろたえる私に、ローウェルの目が細められる。嫌な予感がしても逃げ場はなくて、ポールに縋るしかできない。

「そうか……。清らかな聖女に、これからスケベなことを叩き

こんでやろう。オレ好みの、どこに出しても恥ずかしい下品な
メスに堕として……四六時中アクメするしか考えられない変態
聖女にしてやる♡♡」

変態だなんて、あんまりな台詞に文句すら出ない。けれど……
たとえ魔族の慰み者になろうとも、聖女として堕ちるわけに
はいかない。心の中でつよく誓ってローウェルを睨みつければ
、彼は不敵に笑った。

「さあ、覚えろ。ここはまんこと呼ぶ。女だとおまんこと言う
者もいるか」

「お、まんこ……?」

「そうだ。……ふふ、たまらないな」

女性器の名前をただ口にしたただけなのに、なんだかひどく卑

狼なことのような、いたたまれない気持ちになる。

「これが、まんビラ。ビラビラになってるんだ。見たことはあるか？」

「ない……」

「じゃあ今度は鏡の前でやろうか。足を開いて……自分で触ってみるといい」

「やだ、そんなのできない……!」

「大丈夫、すぐにまんズリオナニーでアクメキメられる立派なメスになれるさ。……ほら、ここは何て言うんだった？」

「ああ……ッ! ま、まんビラ……!!♡」

「そう、よくできたな」

両手で摘まれたそこが左右に開かれて、褻の奥が暴かれる。

クチュ……♡と、いやらしい音が部屋に響いた。

「そしてここが、聖女のまんこ穴♡　はは、もう濡れてる……
あー………♡」

「きゃッ!？」

ぬるり、と何かが体内に潜り込んだ。

……ローウエルの舌だ。意識した瞬間、頭の中が真っ白になる。腰が浮いて、穴から舌が抜ける。

——その時。

「動くな」

苛立った声と同時に、全身がビシリと固まった。

呼吸はできる。声も出せる。でも、ポールに縋った体はビクともしない。

「あ、れ……？ 動かない……！」

「暴れて怪我でもしたら……まして、せつかくの処女膜を舌ちんぽで突き破ってしまったらどうする。悪いが拘束魔法をかけさせてもらった。……安心しろ、痛いことはしない。聖女の処女まんこたくさん舐めて、気持ちよくしてやるだけだ。こうやって……♡♡」

「ひい……っ!？」

にゆるり、とローウエルの舌が再び穴の中に入ってくる。熱く湿ったそれは生き物のように、おまんこ穴をネットリと舐め回した。

「あつ、なに、これえ……♡ゾクゾクっとする……！」

「ん……、マン汁出てきた♡エロい味……♡」

「っ、あ！ は……、ああん、だめ、舌やだ……ッ！」
甘いような痒いような感覚がそこを中心に広がって、下腹が
不規則に引き攣る。

「口では嫌がっても、こっちはキュンキュン締め付けて甘えて
るぞ」

「ん……ッ、くうッ♡ふう、う……ッ！」

「我慢するな。その美しい声をもっと聞かせてくれ」

「は、い………っあ、ん！ つふ、うう……っ」

「そう。素直に喘げば、もっとヨクしてやるからな」

「っひ、う………ッアア!？」

不意に、ローウエルの舌がお腹の裏側に押し当てられた。何
が起きたのかわからず混乱すれば、やけに嬉しそうな声が股の

間から聞こえる。

「へえ、聖女のいいところはここか」

「なに、……あつ？　そこ、舌でぐにぐにってされたら……！
ああんっ♡や、………なんか、変……！」

「それが快感だ。気持ちいいだろう」

「あ……ッ、き、もち、いいっ？　ン……！　気持ち、いい……ッ!!」

その単語を口にすれば、応えるようにおまんこがビクビク震えるのがわかる。そうか、私いま気持ちいいんだ……♡

「まんこがうねって甘えてる……♡このままイケそうならイッてしまおう」

ローウエルが舌をぢゅぽぢゅぽ♡と抜き差しを早くする。お

まんこ穴が溶けてしまいそうなほど熱くて……目を瞑って必死に叫んだ。

「やッ、こわい……！ 気持ちいいのどんどん大きくなって、なにか来る……！」

「イクっていうんだ。お前にセックスの礼儀を教えてやる。限界になったら、おまんこイクイク〜♡って言え……♡♡」

収縮するおまんこ穴を舌が搔き回す。処女膜を破らないよう慎重に、けれど襞の一つも逃がさないとばかりにぢゆるぢゆる舐めしやぶる。

また頭の中が白んでいく。お腹の裏側を舌がグニユツ♡♡と
 圧迫する。身体が一気に幸福感に包まれて――。

「イツ……ク♡!! おまんこ、イツく……… ううううづ〜

♡♡♡

「ン……♡♡」

「ア……♡♡あ、ああ……、だめ、それだめ……ッ！
ッてるおまんこベロベロしないで♡んああ♡またいくつ！
またくる……ッ!!」

ぐちっ♡ぐちっ♡ぐちっ♡ぐちっ♡

長い舌に犯されて、制御できない腰がカクカクカクカク♡前
後に痙攣する。はしたないとわかっていながら喘ぐしかできな
い。

「あ、あ——……、んあ……♡なに、これえ……？ おま
んこ、溶けちゃう……♡ああん、すごいよお……♡♡」

「ン……♡はじめてなのに上手にイケて偉かったな。男の顔に

またがつて腰を振って……まるでサキュバスのようだったぞ」

「いじわる……、んンッ!?」

突然、ぐるりと視界が反転した。

押し倒されたシーツのさらりとした感覚が肌に直接触れて少しくすぐったい。上からこちらを見下ろすローウェルの唇は、私の体液で濡れていた。

「もう少し慣らすから足を開いて」

「こんどは、なに……」

「そう怯えなくていい。指を一本入れるだけだ」

「ア……ッ！」

はじめてイッたばかりのおまんこ穴に指が入ってくる。舌に比べて細くて硬いそれは、痛みはないものの長さや形がはつき

りとわかる。

中の感触を楽しむように、指はゆっくりと動きだす。さつき
トドメをさされたお腹の裏を撫でられると腰がビクビク波打っ
た。

「や、んあ——……ん、う……ッ♡」

「そんなにここが気に入ったか？」

「アッ！♡そ、そこっ、しつこいのやだ……ッ♡♡」

「ここはGスポットというんだ。触るとザラザラしていてわか
りやすい。……指の腹でゆっくり擦られると、たまらないだろ
う」

「ヒ……ッ！ や、あ~~~~ッ♡♡き、きもちい……ッ！
じーすぽっと、きもち……!! うああ~~~~♡」

「マン汁が次から次へと湧き出てくるな。聞こえるか？　グチュグチュ〜♡って、エロい音が響いてる……。指一本でこんなになるなんて、相当なドスケベだぞ♡」

「わたし、ドスケベなんかじゃ……。あ、ああ〜♡やだ、じーすぽっとコスコスしないで♡ンあ、またいぐ……。ッッ!!」

ビクビク……。ビクンッ！　と全身を痙攣させながら絶頂する。緊張と弛緩を何度も繰り返して……。力尽きた両膝が、パタリと音を立てて外側を向いた。

「はー、はー……。ンはあ……。♡♡」

「聖女なのに……。そんな、動物が服従を示すようなポーズをしていいのか？　まったく、オレ好みにもほどがあるだろう♡ほ

ら、ガニ股に開いたマン肉の割れ目からクリちんぽが見えてるぞ♡」

息を整えるのに必死でローウエルの言葉が聞こえない。けれど指先がとある一点に触れた瞬間、足先から頭のとっぺんまでジリッ！と電流が走った。

「アッ!?♡♡♡」

「聖女のクリちんぽ、小さくて摘まみにくいな」

「アッ！ンあアッ!?♡♡」

「まんこ締まった……。クリちんぽをグリグリいじめながら、おまんこズポズポ♡ピストンするの気に入ったか？」

ローウエルの親指が小さな突起を捏ねるように押し潰す。さつきまでGスポットを撫でていたはずの指はいつの間にか抜き

差しする動きに変わっていた。

ひっくり返った体がビクビク震えて、全身に汗が噴き出す。

「や……ッ！　そこやだあ！　グリグリされると、頭おかしくなる……!!　もうおまんこイキたくないのに、またきちゃう……!!」

「まんこキュウキュウ♡締まって、イキそうなのがわかる……♡イケばイクほどヨくなれるから、このままクリちんぽいじられてもう一回イッてみる。ガニ股で情けなくイクとこ見せろ……ッ♡」

長く骨ばった指がおまんこから溢れたヌルヌルを掬い取って、クリちんぽを下から上へとやさしく撫で上げる。にゆるん♡にゆるん♡♡と摩擦なく触れられると甘やかされているみたい

で……頭がふわふわする。

「あ、ふああ~~~~~……♡これ、だめになる♡きもちいいの、やだあ♡♡ん、やあ~~~~♡」

「甘ったるいアクメ声かわいい……♡聖女、口を開けて」

「ん、キスやら、あ♡♡ちゅ……♡♡ん、っぢゅるる~~~~~」

……♡♡

ローウエルはその舌で奥に縮こまった私の舌をにゆるにゆる絡めとりながら、下半身を指で翻弄する。

「ふあ……♡んやあ♡キスしながらクリちんぽいじられるの、いいよお……♡」

ふつと吐息がかかって、ローウエルが笑った気配がする。

「まんこがぐにぐに~~~~ってたくさん動いてる。初めてなのに

、こんなにいやらしくて……最高だよ、お前は」

おまんこクチュクチュ♡いじられながら艶のある声に囁かれ
ると、あそこがキュン♡と反応してしまう。なんなの、これ……！

「っふ……、もう、指だめです♡これ以上はほんとに………
ッあ？ あッ!? 待って、激しい……っ！ んやあ~~~~~
ッ!!」

「Gスポ擦りながらちんぽシコシコ気持ちいいな？ ほら、こ
のあたり……クリのちょうど裏側をグッと押すと……♡」

「ア——ッ!?♡それだめ、おまんこ変………なんかおかしいっ！
おねが、とめて……指とめてくださいっ♡♡ねえほんとに
………ッンア~~~~~!!」

「いいぞ……そのままアクメするとこ見せろ……ッッ!!」

「オ………ッ! デ——ッッ!! ……ンあデッ!! やだ

、なんかでちゃ……あ、ああ……! でるうつ♡ 見ないで、
見ちゃだめえ……!!」

ブシュ——ッ♡♡♡

圧倒的な解放感とともに何かが噴き出す。

「あ、うそ、漏らして……!? いやっ! ごめんなさい、ごめ
んなさい……ッ」

「ん? ああ、これは潮吹きだ。恥じるようなものじゃない」

「しお……? わたし、おしっこ漏らしちゃったんじゃ」

「女が感じると出てしまう生理現象だ、男にとっての射精のよ
うなもの、と言えはわかるか?」

あいまいに頷けば、ローウェルは安心させるように私の頭をそつと撫でた。

「たくさん気持ちよくなった証拠だから気にしないでいい。…それに、仮にお前が漏らしたとしてもオレは気にしない」

彼はそう言い、自分の服に手をかけた。上質な素材のシャツとスラックスだけでなく、下着もさっさと脱いでしまう。

露わになった体は魔族の騎士団長として日々鍛錬しているのだろう、しなやかな筋肉がついて、まるで彫刻のようだった。

——ある一点以外は。

「あの、それは……」

震える手で、その下半身にぶら下がったものを指差す。

男性器を目にするのが初めてでも、ローウェルのそれが常識

を逸脱したサイズなことくらいはわかる。

のけ反った竿の長さは私の手首から肘よりも大きいし、太さは片手では到底握めそうにない。表面にはいくつもの太い血管がビキビキと盛り上がっていた。キツイ段差のついたエラの先、丸い先端の割れ目からは白濁の雫がとろとろと筋を作っている。根本にはズッシリと重たげな玉が左右にぶら下がって……まるで、グロテスクな魔物のようだった。

それなのに……なぜか眺めているとおまんこがムズムズして落ち着かなくなってくる。いつの間にか口内に溜まった唾液を飲み込めば、ゴクリと喉が鳴った。

「魔族のものは人間の粗末なちんぽと比べて大きいからな。オレのような上級魔族となるとなおさらだ」

ローウェルは恐怖に硬直した私に覆い被さると、その大きな竿を握っておまんこの入り口にペチッ♡ペチンッ♡と軽く叩きつける。触れた部分がひどく熱い。

「ア……ッ、ん、ああんっ♡♡挿れちゃだめ……っ」

「何をいまさら。お前もわかってるんだろう？　これをハメたら、ありえないほど気持ちがいいと」

「そんなの思ってない……っ！」

頭を左右に振っても、おまんこの入り口がくぱくぱ♡勝手に開閉する。おちんぽでビンタされるたび奥のほうが切なくて仕方なくて……。このムラムラの正体が、ローウェルのおちんちんを欲しがっているのだと嫌でも自覚させられる。

「うっ、んううううう♡♡♡」

腰がくねって媚びるような声が溢れる。今すぐ逃げ出したいのに、ただでさえガニ股に開いた足をさらに広げてしまう。これじゃ、ねだってるみたいじゃない……！

「ごめんなさい、神様あ……！」

「この期に及んで神に許しを請うとは、健気なことだな。……大丈夫、お前はオレに捧げられた慰み者として使命をまっとうしているだけだ。その心は神のもの……そうだろう？」

「そうです、あ♡私は神の……ッあん♡や、んあ♡♡」

「なら、体を明け渡したところで何も変わりはない……。そうは思わないか？」

コリュ、コリュ……♡♡

クリちんぽの裏筋を太い血管でゴリュゴリュ擦られて、目の

前に星が散る。

はしたない私を、神はお許しくださるだろうか。国を守るためだと。……魔族ちんぽで犯されても仕方がないと♡♡

「言え。……お前は どうしたい？」

まるい先端がおまんこ穴にほんの少しだけ潜り込む。濡れそぼったそこからクチュ♡と卑猥な音がして………脳の回路が焼き切れた。

「くくくだ、さい♡その大きなおちんぽ、私のおまんこに挿れて……！♡♡」

「……いいだろう、たくさんアクメさせてやる♡」

おまんこがメリメリと音を立てながら拡がっていく。破瓜の痛みは不思議となかった。

熱く太い棒が自分の中に埋まっていく充足感に総毛が立つ。

「ッ、ア——♡♡！ おちんちん、はいってくる……！」

「これが、聖女まんこ……♡ キツくうねって……くそ、油断するとすぐイッてしまいそうだ」

「ん、んう~~~~♡奥、ずっと切ないのやだあ……♡♡ムズムズするの、とめてください……ッ！」

「おねだりが上手いな♡もちろんだ、カリ首でお前のいいところをたくさんゴリゴリ引っ掻いてやる♡」

ローウエルの極悪おちんちんがピストンを開始する。

少しの隙間もないほどミチミチに埋まったおちんぽにぢゅこぢゅこ♡ごりゅごりゅ♡♡おまんこをかき乱されて、頭の先まで快感が突き抜ける。